

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の 39 年（第 10 回）

塩尻 宏

（中東調査会参与、元駐リビア日本国大使）

本文はアラビア語専門の外務省員として 39 年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012 年 8 月 28 日から 2013 年 10 月 1 日まで 29 回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに 9 年間の経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

第 10 回 ≪南イエメンで一人大使館の開設と大統領処刑事件≫

≪南イエメン：大使館事務所の開設≫

アデンに赴任した私は、取り敢えず、クレセント・ホテル 2 階の 2 部屋ほどを月極め契約して仮事務所としました。日本外務省の組織上はアデン出張駐在官事務所、カイロに駐在する特命全権大使の指揮下に置かれていましたが、対外的には在南イエメン日本国大使館と称し、一人しか居ない私が臨時代理大使を名乗ることになりました（中東調査会の『中東・北アフリカ年鑑 1981~82』によれば、在南イエメン日本国大使館の開設は 1977 年 5 月 28 日）。しかし、大使館としての業務が軌道に乗るまでには、当局と交渉して電話を

引き、電信アドレスを登録して本省に報告、現地では調達できない事務用備品の送付を本省に依頼、現地職員の採用手配など、処理すべきことは山ほどありました。

まずは着任挨拶のため南イエメン外務省に外務次官を表敬訪問しました。東京に注文した館用車は未だ到着していませんでしたので、ホテルの前にたむろしていたタクシーで外務省に向かいました。運転手は小柄で初老のイエメン人で、寡黙で純朴な感じでしたが、黄色と黒色に塗り分けられたタクシー特有のボディは煤けてあちこちが凹み、ドアの閉まり具合も不完全で、辛うじて走るようなシロモノだったのを覚えています。

しばらくして、男女2名の現地職員（クラークとタイピスト）を雇いましたが、それまでの間は、全て私一人で対応せざるを得ない状況でした。パソコンもない当時は、カイロから携行してきた英語とアラビア語のタイプライターを使って口上書などの書類を自分で作成していました。出来上がった文書は、ホテルの前にたむろしていたタクシー運転手に頼んで配達していました。当時のアデンには湿式の青焼きコピー機でさえ普及していなかった状況でした。そのため、同内容の文書を複数部数作成する時や控え用の写しが必要な時には数枚のカーボン紙を挟んでタイプしていました。1文字でも打ち間違えると全てやり直しとなり、苦闘したことを覚えています。

館員が一人しか居ないとは言え大使館ですので、在留邦人保護も重要な仕事です。当時のアデンには私が赴任する以前から日魯漁業（株）（現在は「マルハニチロ」に経営統合）の事業所があり、部長級の所長の下に 5～6 人の日本人職員が駐在していました。日本の商社員がビジネスの可能性を探るため稀に出張してくるくらいで、日魯アデン事業所の駐在員以外に在留邦人は居ませんでした。私の駐在はアデン事業所の所長を始め全員から歓迎され、孤軍奮闘した



在南イエメン日本国大使館事務所開設に関しても、彼らから様々な支援や協力を得ました。今でも身に沁みてありがたく思い出されます。

アデンに赴任して間もなく、外務省と在エジプト

大使館と私との協議の結果、公文書の送付と接受、会計経理などの処理については親公館である在エジプト大使館の大幅な協力が得られることとなりました。また、その業務連絡のため、原則として2～3週間毎にカイロへの出張が認められることとなりました。当時は、乗継便を含めてもアデンとカイロの間で利用できる飛行機便数が限られていたので、カイロに行けるのは月に1回程度でした。

《南イエメン：外交団の一員として》

さて、新しく大使館事務所を開設するために赴任した外交官は、まずはその国の外務省に対して同人が駐在のために着任した旨を通報すると共に、事務所用の物件を探する必要があります。事務所が決まると、先方外務省及び諸外国大使館に対して正式な文書（口上書）をもって、日本大使館を何処どこに開設し、誰それが大使又は臨時

代理大使として館務の執行を開始した旨を通報して、外交団に仲間入りすることになります。

当時の南イエメン(イエメン人民民主共和国)の首都アデンには、社会主義諸国やアラブ諸国を中心に 20 カ国ほどの大使館があったと記憶しています。ソ連、中国、エジプト、イラクなどの幾つかの国は特命全権大使が駐在していましたが、その他の国の殆どは近隣国に駐在する大使が駐南イエメン大使も兼任し、現地には臨時代理大使が駐在していました。各国大使館を順次表敬訪問して着任挨拶がひとわり終ると、レセプションなどにも招かれるようになり、各国の外交官との会話から現地事情について情報も少しずつ得られるようになりました。

在アデン外交団の一員としての生活が始まりましたが、対外的には臨時代理大使を名乗って外交団と交際しながら、現地職員もまだ雇用できていない時期の事務所では、電話番から書類整理を含む全ての業務は私一人で対応していました。その中には、東京の外務省に業務連絡電報の発受信、事務所用消耗品購入や諸経費などについて簡易出納簿による会計処理、少額ながらも銀行口座の管理、アデンに寄港する日本船の報告証明(管海官庁業務と呼ばれる行政事務の一部)などがありました。ちなみに、当時は東京外務省への報告はローマ字タイプ打ちした電報をアデンで唯一の民間電報局(英国系の Cable and Wireless)の窓口を持って行き送信を依頼していました。

《南イエメン：外交文書の交換》

私のアデン在任中に、日本政府の援助(ODA)による一般無償資金協力(漁業訓練船の供与：450 百万円)に関する口上書の交換(交換公文)を行ったことがあります。定められた書式の文書を2通作成し、南イエメン政府の外務次官と私がそれぞれに署名をして交換しましたが、私にとっては日本政府を代表して外交文書に署名したの

は初めてでした。35年も前のことなので、その正確な日付は覚えていませんでしたが、外務省資料によれば1977年9月6日となっていました。

国家元首、首相、外務大臣、特命全権大使以外が外国との間で履行義務を伴う公文書（条約、協定などを含む）に署名する場合には委任状が求められます。署名に先立ちお互いに相手側の委任状を確認する必要がありますが、日本の外務大臣名の私の委任状は東京から在エジプト大使館経由で送られてきました。

文書の交換が終わると直ちに電報で東京の外務省に報告し、それを受けて外務省が正式発表する段取りになっていました。事務所に戻ると、「交換公文は予定どおり完了した」旨の電報を外務省あてに発電しました。口上書を準備し、署名し、報告電報を書いて、電報局に持って行くまでを私一人で行ったわけですが、大使館又は外務省の仕事の流れを知る上で有益な経験だったと思います。

《ダッカ日航機ハイジャック事件の余波》

1970年代の中東世界は、ナセル・エジプト大統領の急逝（1970.10）、湾岸諸国の独立（1971.8～12）、第4次中東戦争（1973.10）と石油危機、エジプト・イスラエル和平合意（1978.9）、イラン革命（1979.2）など、重大事件が立て続けに起きた大変動の時期でした。他方、日本では浅間山荘事件（1972.2）に象徴される赤軍派の活動が活発化した時期でもありました。1971年にパレスチナを拠点として組織された日本赤軍は、テルアビブ空港乱射事件（1972.5）、ドバイ日航機ハイジャック事件（1973.7）、シンガポール事件（1974.1）と在クウェート日本大使館占拠事件（1974.2）、ハーグでのフランス・オランダ大使館襲撃事件（1974.9）、クアラルンプールでの米・スウェーデン大使館襲撃事件（1975.8）などのテロ事件を次々に実行して世間を震撼させていました。

私がアデンに単身赴任して4ヶ月ほど経ち大使館事務所の設営作業もひと段落した1977年9月末のある日、本省からの連絡で赤軍派メンバーによる日航機ハイジャック事件（ダッカ事件）が発生した旨知らされると共に、犯人側がアデンをハイジャック機の最終目的地としたい意向を示しているので、南イエメン政府に受入れを要請するようにとの指示がありました。1977年8月28日、ボンベイ（現在のムンバイ）を離陸したパリ発東京行きJL472便（乗客137、乗員14、DC-8）が丸岡 修、和光晴生ら赤軍派メンバー5名にハイジャックされてバングラデシュの首都ダッカの空港に着陸し、犯人たちが身代金600万ドル（当時、約16億円）と仲間9名の釈放を要求する事件が発生しました。いわゆる「ダッカ日航機ハイジャック事件」（1977.9.28～10.3）です。

表向きは大使館ですが、一人しか居ない館員では先方政府との折衝及び人質の乗客・乗組員が解放された場合の対応に万全を期すことは困難でした。事の緊急性と重大性に鑑みて、作業の指揮及び支援のため急遽カイロから魚本藤吉郎大使（駐南イエメン大使兼任）と小串敏郎在サウジアラビア大使館一等書記官（リアド出張駐在）が直ちにアデンに派遣されました。

魚本大使は前任地のシンガポールで、在クウェート日本大使館占拠事件（1974.2）の前触れとなったシンガポール事件（1974.1.31）に遭遇し、日本赤軍とパレスチナ・ゲリラ（PFLP）の犯人グループとの交渉を経験したベテラン外交官でした。その事件の犯人たちは日本政府が提供した日航特別機（DC8）で最終的にアデンに到着して南イエメン当局に投降し、逃亡しました。そのような経緯もあって、今回も南イエメン政府に犯人たちの受入れを要請することとなりました。

アデンに到着した魚本大使とアラビスト大先輩の小串書記官と共に直ちに南イエメン外務省を通じて人質の安全のために本件ハイジャック事件の犯人受入れを要請しましたが、今回は南イエメン政府

としては本件テロ事件及びその犯人らとは無関係であるとして、受入れに難色を示しました。双方の間で折衝が続く中、10月2日になって、犯人たちは人質118名を解放してハイジャック機でダッカを離陸しました。クウェート、ダマスカス（17名解放）を經由して10月3日にアルジェに到着して残り的人質全員が解放され、犯人たちはアルジェリア当局に投降しました。

1975年8月のクアラルンプール事件でも犯人側の要求により日本政府が提供した日航特別機（DC8）が最終的にリビアのトリポリ空港に到着（1975.8.8）し、人質と乗組員を解放後、犯人たちはリビア当局に投降しました。当時、在エジプト大使館に居た私は、本省からの指示で同僚館員と共に急遽トリポリに出張しました。関連情報の収集と人質の安全確保に万全を期すようリビア政府に要請するのが役目でしたが、犯人側に同情的なリビア政府の関係者との接触や情報収集は殆どできなかつたと記憶しています。今回も、遠くダッカで始まった事件に思いがけず巻き込まれた形となりました。数日間の出来事でしたが、犠牲者を出さずに事件が解決したことは幸いでした。

《指導部内の武力抗争とルバイア・アリ大統領の処刑》



当時の南イエメン3首魁（1977）
正面前列の左から Muhammad 首相、Rubai Ali 大統領、Ismail NFPO(民族解放戦線政治組織)書記長

南イエメンでは1967年11月の独立以来、ソ連の支援を受けたNLF（民族解放戦線）が主導権を握っていました。シャアビー初代大統領（兼NLF書記長）が1969年6月に失脚して以降はイスマイル（Abdel-Fattah Ismail）書記長、ルバイア・アリ大統領（大統領評議会議長）、ムハンマド（Ali Naser

Muhammad）首相によるトロイカ体制が続いていました。その間、どちらかと言えば穏健派で民族主義路線の大統領と親ソ連派で急進的

な社会主義路線の書記長との確執が徐々に深まっていたようです。独立 10 周年目の 1977 年 11 月に NLF は NFPO（民族戦線政治組織）と改称し、イスマイル書記長が党内序列第 1 位となって実質的に南イエメンの最高実力者になりました。その結果、両者の路線対立は決定的となり、ルバイア・アリ大統領が巻き返しを図ろうとしましたが、ムハンマド首相が書記長側についたことで挫折して大統領は粛清されました。

私がアデンに赴任した頃には、ルバイア・アリ大統領は既に 8 年間も国家元首の座にありました。駐南イエメン大使を兼ねていた駐エジプト日本国大使が 1977 年に同大統領に信任状を奉呈した際に私も同席したことは前に書きました。それから 1 年も経たない 1978 年 6 月 26 日に、南イエメン指導部内での権力争いが表面化して武力抗争に発展し、ルバイア・アリ大統領が処刑される事件が起きたわけです。

信任状奉呈式の際に同大統領と直接言葉を交わした私には、カリスマ性と共に温厚な人柄を感じさせる人物との印象を持ちました。私は外務省在職中に少なからずのアラブの指導者と直接言葉を交わした経験があります。いずれもその国の最高指導者として周辺の人々を惹きつけるカリスマ性を持った人たちでしたが、ルバイア・アリ大統領を含めてサウジアラビアのファイサル国王、イラクのサッダーム・フセイン大統領（当時は革命評議会副議長）、リビアのカダフィ指導者など幾人かの指導者はその後不本意な死を遂げています。そのような報道を耳にするたび毎に、アラブ世界の政権運営の想像を超える厳しさを感じさせられました。

《武力抗争の勃発と邦人保護》

1978 年 6 月 26 日の午前中、いつものとおりクレセント・ホテルの 2 階にある事務所で書類整理などをしていましたが、丘の向こう

の大統領官邸と思われる方向から断続的に爆発音が聞こえてきました。階下に降りてホテルのマネージャーに事情を尋ねると、クーデター未遂があったようで一部では未だ戦闘が続いているようなのでホテルの外には出ない方が良いとの話でした。普段でも人通りが多くない町でしたが、街角には全く人影が見えませんでした。ただならぬ様子に緊張感が走りました。

このような異変があれば、先ずすべきことは在留邦人の安否確認です。事務所があるホテルにはたまたま前日に到着した東京の外務省からの出張者が滞在中でした。その他、唯一の在留邦人である日魯アデン事業所関係者の所在と安全は直ぐに確認できました。歩いて数分のところに外国人旅行者が宿泊する可能性のあるホテルがもう一つありましたので、周辺に注意を払いながら徒歩でそのホテルに赴いて念のために確認しましたが、邦人の滞在客は居ませんでした。やがて、BBCのアラビア語放送でもアデンでの武力抗争について伝え始め、事務所の近くでも散発的な銃声が聞こえるようになりました。昼過ぎにはジェット戦闘機が飛来して数度にわたり大統領官邸と思われる方向を爆撃するのが事務所の窓から見えたのを覚えています。

次にすべきことは、アデンに居る邦人全員の無事を確認したことを東京の外務省に連絡することです。急いで東京に電報しようと思いましたが、外部との連絡が遮断されたとの未確認情報もあったので、安全上からも事務所から離れたところにある電報局まで行くことを断念し、別途の方法を考えせざるを得ませんでした。折に触れて僻地公館勤務の難しさや面白さなどについて話す間柄になっていた西ドイツの臨時代理大使が、彼の事務所は駐北イエメン西ドイツ大使の指揮下にあり、アデンからの日常連絡は在サナアの西ドイツ大使館に無線で送信し、そこから本国に伝えられていると言っていたことを思い出しました。早速、彼に電話して事情を説明し、在アデンの日本人は全員無事との英文メッセージを日本外務省に伝達

するよう依頼しました。そのメッセージはサナアとボンを経由して東京に届けられたことは後で聞きました。当時の西ドイツ臨時代理大使の好意的な対応には今でも感謝しています。

ルバイア・アリ大統領はその日のうちに軍事裁判にかけられて死刑を宣告され、即日処刑されたことで翌日には事態が収束しました。一時的に閉鎖されていたアデン空港も再開され、本省との連絡も取れない状況で日程や経路の変更も懸念していた東京からの出張者は、当初予定の便で出発しました。

《南イエメンからヨルダンへ》

その後しばらくして、私のアデン単身在勤は終わりとなり、1978年7月に在ヨルダン日本国大使館に異動となりました。あれやこれやで結構忙しい日々でしたが、アデンでの生活は色々と有益な経験ができた時期でもあったと思います。

アデンには家族を同伴することは困難でしたので単身赴任となりました。その間はカイロに残した妻と2人の息子は同伴家族とは認められず、配偶者（同伴）手当やカイロでの住宅手当の支給が停止されたことは前にも書きました。当時の在エジプト日本国大使館の上司を通じて再三にわたり善処を懇請しましたが、打開策が見出せないまま離任の時期を迎えました。結局、カイロに居残った妻と2人の息子の生活のためにアデンに出稼ぎに行った形になりましたが、私の後任者は幸い独身者でしたので、その問題はありませんでした。

1年2ヵ月ほどの短い任期でしたが、仕事上も生活上も不自由なところで大使館事務所を設立するという経験から、多くの事を学びました。困難な環境にある時に頂いた人々の支援や協力が、身に沁みてありがたく感じられたことを今でも思い出します。（続く）